特別研究助成費　報告
「教育研究への活用を目的とする写真画像を含めた民俗資料データベースの考察」Ⅱ

暮らしの中の『今』を残すⅠ

跡見学園女子大学 文学部 人文学科 教授
倉石あつ子

はじめに　―民俗資料としての写真の扱い―

民俗学は生活文化を研究対象とする学問である、といいつつ、実は現在＝今をどう残すかということはあまり検討してこなかった。生活文化の中には日常・非日常生活が含まれるわけだが、特に日常は日々の当たり前な生活の営みであり、それを記録するための方法としては、日記、金銭出納帳、献立控えなどいろいろな方法がある。しかし、それらは残そうと意図して残していたものではなく、個人の関心によって偶然残ったものであることが今までは多かった。しかし、近年の生活の変化は「今」を残しておかないと刻々と変化してゆく。電化製品しかり、家の中で使用する道具しかりである。また、各戸による生活の多様化も進み、モノは次から次へと捨てられ、購入されてゆく。たとえ写真が残っても、その使い方などの説明が残されていなければ、何にどう使用したのかも分からないものになってしまう。今までのように「偶然残った」ものではなく、「意識して残す」ことを考えなければならない時代に入っている。

民俗学の一分野である都市民俗学では、従来の民俗学の方法とは手法を少し変え、定点観測なども取り込んで、「今」を記録に残そうと試みた。例えば『軽井沢町誌』がその一つで、定点観測することによって、軽井沢という古くからの別荘地を訪れる若者たちが何を目的として訪れているのか、行動の流れを通じて観察しようという新たな試みであった。300坪以上の敷地の森の奥深く居を構え、涼と静けさを求めてやってくる日本のハイクラスに属する人々と、ａｎａｎやｎｏｎｎｏに触発されて「軽井沢の流行」に浸りに来る若者たちとは対照的な存在であったからである。民俗学的にいえば、軽井沢という街の中が別荘族で膨れ上がる夏に、それまでの別荘族とは異なる若者があふれかえる。それもまた、民俗学の研究対象になるのだということを証明するための一つの試みでもあった。更に言えばそれは軽井沢という「避暑地」を対象にした非日常の場にやってくる人々が、何を目的にして訪れてくるのかという意識を捉えようとしたものであり、日常生活を捉えようとしたものではなかった。軽井沢町誌での試みは当時としては新鮮な試みではあったが、それを日常生活の調査に応用することはなかった。同じような試みは「渋谷学」の中でも行われているが、研究目的としては軽井沢と同様のものであったといえよう。

一方、文化人類学でも同様の試みがなされ、国立民族学博物館の研究成果としてソウルの高層アパートに暮らす人々の生活ぶりを収めた写真をふんだんに使用した報告書が出されている。最近では2014年10月4日に日本民俗学会 2014 国際シンポジウム「“当たり前”を問う！―日中韓・高層集合住宅の暮らし方とその生活世界―」が行われている。開催趣旨は「都市化によって私たちの生活は画一化され、みなが同じような暮らしを送るようになりました。集合住宅とは、まさにモダンで均質的な暮らしを生み出す空間でした。その一方で、私たちは日々さまざまな工夫をしたり、自分だけの居場所を作ったりします。ひとつひとつの部屋を細かく見れば、まるで生きているかのように多様に変化しているはずです。日本を中国や韓国などの隣国と比べると、そこに文化ごとの違いも見えてくるかもしれません。民俗学の視点を生かし、住まいや住まい方という「日常」や「当たり前」を振り返ってみます。」（日本民俗学会ＨＰより）というものである。シンポジウムに参加しなかったので、日中韓のどのような文化的異同がみられたのか分からないが、「あたりまえ」という日常に視点をあててみることにより、今までとは異なった日常のそれぞれの暮らしぶりがみえてきたものと思われる。

今まで、日常の当たり前は、当たり前であったからこそ写真資料として残す、あるいは資料として記述しておくという意識的な作業が行われてこなかったことは先に述べた通りである。しかし、実際には写真資料への関心は高く、事（辞）典類、概説書などさまざまな文献に写真の多用が求められる。編集を担当する研究者は、写真をもっていそうな研究者や写真家に問い合わせ、目的にあった写真の調達に苦労する。特に古い時代の写真は、事象の説明を補う存在として読者の理解を助けるために用いられるが、写真の保持者さえそこに写る人が誰なのか、いつの時代のものなのか、写っているモノがなんなのかさえ分からない場合も多い。2014年11月9日國學院大學において「（古）写真の資料化について：民俗学として何ができるか、何を期待されるか」のテーマのもとに、日本民俗学会第877回談話会が行われている。「（古）写真は、資料としての汎用性の高さと同時に、資料批判の難しさから、安易な利用の危険性が指摘されてきた。一方、より一層の利用を期待する学問分

野は多く、一般書においても様々に利用されてきている。それはひとえに、（古）写真に埋め込まれた情報の量の多さと多様性に起因する。それゆえ、（古）写真の資料化は、ひとつの学問分野だけで図られるはずもなく、分野を超えた協業が必要である。」ことを問題提起のもと、シンポジウム形式で研究会を行ったことが報告されている。

民俗学研究者の多くは、意識して折々に眼に触れたものを撮影し資料として残している。しかし、その管理方法は個人に任されているので、整理の仕方も保存の仕方も一様でなない。また、研究者個人の家の事象も撮影していると思われるが、それらが公開されることはまずない。祭りや年中行事・人生儀礼・折々の生業など多くの研究者は写真資料をもっており、「現在」を残しているはずである。日本民俗学会でも国立歴史民俗博物館でもそれらのものを一括収集して、管理するシステムはできていない。ということになると、個人の研究者は写真家が残す偶然の現在が、貴重な資料となることを期待するしかない。

1．個人が残した生活写真　―写真が語る生活―

一昨年からたまたま、同じような年代（お二方とも90歳余）のお二人の方（M氏＝東京都出身とN氏＝石川県出身）から、アルバムに貼られた写真をみながら聞き取り調査をする機会に恵まれた。お二人はまったく別の地に住み、縁も所縁もない方なのだが、実はこれは後に分かったことだが兵役に就かれた時期も同じ頃、戦後の勤務先も同じ系列の会社であった。お二人とも大量の写真を保管しておられてる点が共通しており、お一方の場合はある目的のためにそこに写る人を特定する作業に力を注ぎ、もうお一方の場合はそこに写っている事象を特定する作業に力を注いで調査をさせていただいた。それぞれに一部はすでに活字化された雑誌に掲載されて公開されている。お二方の写真の保管の仕方には共通点が見られる。それはアルバムに、ほぼ年代順にきちんと貼られて、整理されているという点である。更にお一方の方にはちょっとした説明も書きこまれているので、写っているモノ・ヒトに関わる情報がかなり正確に把握できる。その時の「現在」は今となっては過去の事象であるが、過去であるからこそ生活の移り変わりを写真から読みとることができる。

たとえば、書き込みには昭和32年とあり、正月を迎えるための餅つきがされている場面が写っている。手返しをする女性も餅をつく男性も手拭で頭を包み、男性は杵を振り上げている。その下で腰を曲げて女性が手に水をつけて臼の餅を手返ししている。臼は土間に藁を敷いた上に置かれている。向こうには竈があって、湯気を立てている蒸籠が釜の上にかかっているから、今ついているものだけではなく湯気の立っている蒸籠の分もこれから搗かれるのであろうことが予測される。臼からそう遠くないところは一段高い板の間になっていて、そこにはのし板がおかれ、家の祖母らしき人が餅を丸めている。たぶん、正月様や家の神々にお供えするための鏡餅であろう。少なくとも、一臼目は搗き上がり今は二臼目をついていて、更にもう一臼か二臼は搗くのだろう事が、蒸籠のかかり具合から予測される。別の写真には田植えの様子が写されており、機械が導入される前の田植えの様子が詳細に分かる。仕事着がどのようなものであったのか、植え方はどうしていたのかなどなど、これまた含まれている情報は多い。

また、もうお一方のアルバムにはご自身の成長過程の写真に加え、新婚旅行らしき写真やお嬢様の初誕生の祝いの写真など家族・親族の写真が保存されているほか、仕事上折々に関わった方々とのコマが収められている。たとえば、初誕生の祝いには、その祝いに着ていた着物の様子や、招待客の範囲、その折の献立などまで確認することができる。また、仕事に関わる写真の多くは、仕事上どんな方々とお付き合いがあったのか、どんな機会に撮られた写真なのかといった、都市生活者の「職場」という生活の一端を読みとることもできる。もし、地方で生活している方の同じ時代の写真と比較することができるならば、その地域差はもちろん、地域差が時間差であることまで読みとることができるであろう。

そうした意味においても、同じ世代のお二方からの写真をめぐっての聞き取り調査は、非常に有意義なものであったし、作りたくても作ることのできない機会でもあった。もっとも、お二方のアルバムは公的なものとして保存してあったわけではなく、中にはごく個人的な情報が含まれるものもあり、全てを公開できるわけではない。また、公開の仕方もかなり神経を使う。聞き取り調査の持つ宿命として、話者の記憶違いなどもあり、何度も確認作業をしなければならない。しかし、何度も確認作業を行うなかで、前回まで思いだせなかったことを思い出していただけることもある。調査者の方の聞き取り違いもある。面倒な作業ではあるが、確認を繰り返すことによってただ話を聞くだけではない、思いがけない情報も拾うことができるのである。

写真で見ればそれは単に「写真」にすぎないが、一葉の写真がもつ情報量は多く、そこに撮影年月日・場所などが書かれていればそれだけでも、その民俗的資料価値は上がる。また、当事者にとってはその写真を見るだけで、当時の詳細な情景までも思い出すことができる手がかりともなるので、聞き取り調査を行う場合、話者の語りを助ける強力な補助資料ともなる。そしてそれらの写真は何年か何十年かしたら、あるいは何百年かしたらある時代を実証するための、貴重な歴史資料として庶民の生活を垣間見ることができるものとなるはずである。

2．都市生活の現在を残す試み　―老夫婦二人暮らしの場合―

上記のような経験をしてみて、民俗学の研究者として「自分の現在」を残すことをしなくて良いのだろうか、と思うようになった。民俗学研究者は他人に関わる写真はよく撮る。しかし、自身が話者となることを拒む人もいるし、自身に関わる身辺に関しては「資料外」と考えている人もいる。特に若い研究者にその傾向が強いように思われるが、研究者の身近にある「現在」も当然記録に残すことができるはずである。というより、話者からの情報を得て研究の糧にしているのであるのなら、自分の身辺のものをも積極的に「残す」ことを考え、世の中に還元していかなくてはならないのではないだろうか。

もちろん、「私」の個人写真を残すのではなく、生活の中で捉えることができる「現在」の道具や習俗を研究者の身の回りで残す試みをしたらどうなるかということである。これはかなり暴露的な試みであるかもしれないが、話者から収奪するだけではなく、時には研究者も話者となって資料を提供できることを提案してみようとする試みである。それも「教育研究への活用を目的とする写真画像を含めた民俗資料のデータベースの考察」の一環として位置づけることができるであろう。今回、伊藤穣は子どもの育児用具で、倉石は台所用具で記録を試みた。

①流し・調理台回り

写真1

筆者が子どもの頃、母がつかっていた台所は土間の一角に木枠で出来た流し台が置かれ、その脇に水甕が置かれていて、必要な水を柄杓で桶に汲みこんで使用するというものであった。水甕に水を汲んでくるのは、子どもの私の役目であり、学校から帰ると井戸のポンプをあおって水をバケツに入れて水甕まで運んだ。隣りの家の主婦も我が家の井戸の水をもらいに来て、天秤棒で担いで往復していた。昭和30年代初めごろ、簡易水道が敷かれ台所にも風呂にも蛇口がついて、その場に水が出るようになって、水汲みの仕事は終わった。母もそれまでは、煮たきする野菜などを池で洗ったり、井戸で洗ったりして台所まで運んで調理した。水場と調理する場所を何回も往復したり、土間と板の間を上がったり下りたりしなければならなかった。竈・囲炉裏・七輪などを使用しての調理で、火加減を調整しながら台所を行ったり来たりの食事の準備は、母の苦労が目に浮かぶようである。当時の台所の写真はない。

現在の台所はいわゆるシステムキッチンで、火は使わない。竈や囲炉裏で火を使って煮たきをしていた長い歴史を考えると、台所の改革は短時間で行われ、非常に便利で研究されたものとなっている。調理器具の収納や調理場所が隣接し、調理時間も短くて済むし、そのための動きも母の時代に比べればなん分の一であろうか。しかも、平面で冬は暖かく夏は涼しい。もちろん、ＩＨであっても熱が出るので調理しているときは、他の空間よりは暑いが、室温はエアコンで調整できる。また、換気扇がついているので、暑さも臭いも外へ吐き出してくれる。調理した物はすぐ隣の食卓に並べ、皆が揃えば食事ができるようになっている。写真１は台所の全体像である。

②釜＝電気釜。飯を炊く時に使用する。甘酒・お粥などもできるが、めったに利用しない。釜には水を入れる目印のメモリがついているので、羽釜のときのように手のくるぶしまでとか、中指の第一関節までなどといった自分の体を使って水加減することはない。米は計量カップで計り、そのカップ数と水の目盛りは比例している。2カップの米に対して、水は2のメモリまで入れる。急いで炊きたい時のために、早炊き機能がついたり、起きる時間にあわせて炊きあがる予約機能、保温機能なども付いている（写真6 向って左参照）。

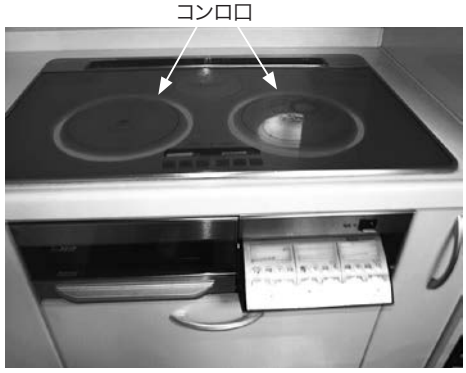


写真2

③コンロ＝火は使わない。電気を使用するＩＨヒーターである。10年ほど前に台所をリフォームした際に、年取った母が火の始末を誤らないようにと導入したものである。実際には、母は勝手が分からないから嫌だと言って使わなかった。火がないので安全ではあるが、火がみえないためにお湯が沸いているやかんの口などにうっかり手を出して蒸気でやけどをすることもある。奥の口に何かをかけている時や奥に置いてある何かをとろうとする時には特に注意が必要である。タイマーを使用するか、４０分経過すると自然に火は消えるようになっているので安全ではあるが、停電などが起こると使用できない。火力は強いが、炭を使って火を熾したい時などには使用できない。写真の矢印部分がコンロ口で、

奥の口にはIH対応型でない鍋などをかけることができるが、ほとんど使用したことはない（写真2）。

④コンロにかける鍋・やかん等＝IH専用鍋・やかんでないと使用できない。土鍋も使用不可である。見た目には普通の鍋である（写真3）。

⑤圧力鍋＝いろいろなメーカーのものがあるが、近年のものは電子レンジに対応するものとなっている。煮込み料理などに便利（写真3参照）。

⑥蒸し器＝IH対応の蒸し器。近年はスチーマーなどが普及してきたために、ほとんど使用しない。20年程前は、自宅で赤飯などを吹かす時、茶碗蒸し・プリンなどを作る時に使用したが、現在はほとんど電子レンジで用が足りる（写真3）。

⑦スチーマー＝鍋に代わり、電子レンジで茹でたり、蒸したりするための道具。シリコンでできている。煮たきが簡単にできる。特に煮込み料理などを手早く作りたい時には便利。2006・7年ごろから普及し始めたといわれている。現在では通販などで大量に買い物をした「オマケ」としてついてきたりもする（写真4）。

⑧おでん鍋＝一度にあげた物を保温するための道具。おでんパーティなどのときに使うが、実際には数年に一度使うぐらいの頻度である。結婚式の引き出物（写真5）。

⑨トースター＝主として朝食のパンを焼くために使用。切り餅も焼けるので、冬場は餅を焼くときにも使用する。そのほか、魚を焼く、グラタンを焼くなどの機能もあり、オーブン代わりに使用できる（写真6 向って右）。

⑩電子レンジ＝物を温めたり、冷凍食品を解凍したりする時に用いる。スチーマーを使用した料理を作る時に使用するので、使用頻度は高い。筆者の子どもの頃は遅く帰ってくる父のためにどんぶりに入れたご飯にお皿で蓋をして新聞紙に包み、更に風呂敷に包んでこたつの隅に入れておいたものであった。今、そんなことをしなくても食べ残したご飯はタッパーに入れて冷凍にしておき、レンジで温めれば炊き立てのようなご飯が食べられる。冷凍するための容器も便利になり、冷蔵庫から出してそのままレンジにいれられる物が多い（写真7）。

⑪まな板＝清潔さを保つために、漂白剤などで殺菌も兼ねて数日に一度処理を行う。また、調理台の壁に立てかけたりせずに、足がついているので立てておくことができる。子どもの頃田舎の台所で使用していたものは木製で、下駄を大きくしたように、日本の足がついていた。台所の床に置いて、物を切ったりしていたので、せめて床にまな板の面が直接触れないように、という配慮がされたものであったのだろう。それを更に大きくしたものがのし板でうどん・そばを打ったり、餅つきのときに持ちをのしたりするのに使用した。家で餅つきを行わなくなって処分してしまった。60㎝から70㎝幅×長さが1mぐらいの大きさで、底にあしがついもので、足の高さは10㎝位であったから、保存場所も必要である。不要になれば処分してしまうしかない（写真8）。

写真3

写真4

写真5

写真6

写真7

現在のものはプラスチック

写真8

⑫包丁（食材を切るための道具）＝向かって右から2本がパン切り用。3本目は果物などの皮むきなどに使用。4本目はいわゆる菜切り包丁で日常的にはこの使用度が一番高い。5本目は出刃庖丁。魚の処理などに使うが、現在は魚も切り身を買ってくることが多いので、ほとんど出番はない。6本目は調理用はさみ。焼き肉を切るなど、これもそれほど出番は多くない。同じようなはさみはこのほかに3本あり、結婚式や葬式の引き出物カタログで包丁を注文すると、ハサミもセットになっていることが多く、必然的に数が増えて行くが、実際の使用頻度は低い。調理はさみというより、食料品が入った袋などが開けにくい時に袋を切るために使用したりしている（写真9）。

写真9

⑬ピーラー　⑭おろしがね

向かって右から、栓抜きと缶きりがセットになった栓抜き。現在は缶ビール・缶詰なども、ほとんどがプルトップになっているので缶きりはほとんど使うことはない。ピーラーはかつては柄の部分が木でできており、木が腐りやすかったが現在はプラスチックで洗っても腐ることはない。3本目は簡易スライサー。キュウリなどを薄く切る時使用するが、ほとんど夫が使用するだけである。4本目・5本目はおろし器。5本目にはおろし機能だけでなく、野菜をついて千切り状にする機能や、スライサーもついている。2・3・5本はやはり20年程前に結婚式などの引き出物カタログで注文したものである。それまで、スライサー機能のついた調理機を使うことはほとんどなかった。（写真10）

写真10

⑮その他調理器具（写真11～15）

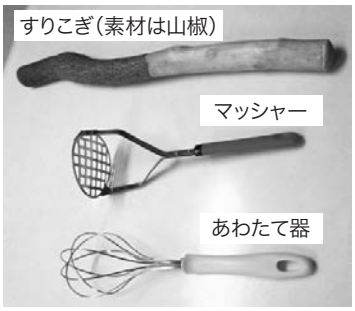


写真11

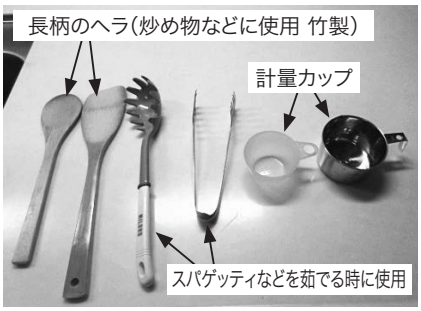


写真12

写真13

梅酒瓶付属さじ

あげさじ
（昔のスイノウに代わるもので茹でものをすくい上げる）

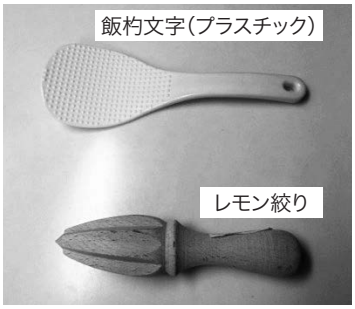


写真14

写真15

（写真15）鍋に水などを注ぐときに使用する。韓国旅行で手に入れたもので、柄杓。10年近くたつが、いまだに役立っている。

3．まとめにかえて

さて、「2」の資料をどう公開するか、役に立つ資料としていかように整理するかは難しい。昨年提案したように、PPTに入れ込み利用に供することがまず考えられる。その場合、資料提供者の情報をどこまで出すかは、個人情報の問題と絡め精査する必要があるが、道具はそれを使用する人の環境と大きく関わる場合が多い。特に台所の調理道具などはそれを使用する人の年齢と深くかかわる。今回の事例の場合、70歳代の老夫婦が使用している道具は40歳代の子ども世代が使用している道具に比較してそれほど多くない。今回子ども世代の道具まで紹介できなかったが、例えば包丁などを見ると子ども世代が

使用しているステンレス包丁より伝統的な菜切り包丁が使用されていたり、すりこぎなどは山椒の木で作成したすりこ木が使われているなど、材質にこだわったものもみられる。子ども世代はすり鉢とすりこ木がセットになったものを使用しており、すりこ木は山椒ではない。また、４０歳代の子ども世代とでは、日々の献立も異なり、それに要する道具も異なる。２で紹介した道具に加えて、４０代世代でよく利用するものはケーキなどを作るための道具が加わる。

今回紹介した事例の世代の親世代（現在健在なら９０歳代）が使用していたものに比較すると、種類は多くなっているがおろし金は金ではなくプラスチックであるし、ピーラーの柄なども木製ではない。まな板も然りで、全体に木製の道具は衰退していることが分かる。親世代が里芋の皮むきなどに使用していた、イモ洗いなどはとうに見かけなくなった。ここには紹介しなかったが、洗いものに使用する桶なども、木製からプラスチック製に代わってしまっている。これが何時変化したのかは、定かに思い出すことができない。いつの間にか現在のものに変わっている、という状況である。

このように生活に関わる道具類は、気づいたら今のものに変化していた、ということが多い。使いにくさを改善したもの、材質が手に入りにくくなって今のものに変化したものなど、変化の理由はさまざまである。今回その一つ一つの変容について検討することはできなかったが、少なくとも「今のモノ」を残すことの価値はその変容の過程の一過程を残すという意味はあろう。今回取り上げた調理道具は、家によってはこのほかにもいろいろなものを保持しているであろう。あくまでも、都市に住む老夫婦二人の生活形態の中でのものであり、ものによっては複数保持しているものもある。したがって、今回、同じ種類に分類されているものの数は、ここでは取り上げなかった。例えば杓文字はプラスチック製が２枚、木製が２枚あるし、オタマは写真と同じぐらいの大きさのものが３本あるが、数はあまり意味をなしていないように思われるので、省略した。

最後に、この作業をおこなってみていくつかの問題点があることを指摘しておきたい。実は、これらの作業は１軒の家をおこなってもあまり意味がないことが分かる。①まずは、地域差を知るために、各都道府県別の調査をおこなうことが必要である。②世代差を知るために、世代別（どのくらい細かな世代差をみるかは研究の目的にもよる）の調査も必要であることが指摘できる。③調理道具なので調理の場面を設定して、道具の分類をおこなうことも必要である。④一軒の家を調査対象とするなら、世代別の使用道具についてどのように使うのかという詳細な聞き取りが必要であり、道具の写真を残すだけでは事足りない。といったことが指摘できる。したがって、こうした仕事は理想的には国立歴史民俗博物館等が企画し、綿密な調査内容計画を立てて、全国的な一斉調査をおこなうことが望ましい。調査員が必要とゆうことであれば、少なくとも過去何年間かの、日本民俗学会理事・評議員などに依頼することはすぐにでもできるはずである。当然のことながら、収集された写真は、データベース化し公開していくところまでを考えて計画を立てるべきであろう。センターになる機関が意識して「今」を残そうとしない限り、「今」は体系的に残ってはゆかない。また、スケッチなども有効であることは言を俟たない。

参考文献

○熊谷元一『会地村: 一農村の写真記録』1938年　朝日新聞社　1985年熊谷元一写真保存会から復刻版刊行
○向山雅重『考古学民俗叢書1　信濃民俗記』慶友社　1968年
○民俗学研究所編『年中行事図説』岩崎美術社　1953年
○倉石忠彦「画像資料と民俗誌」『学術フロンティア・画像資料研究フォーラム（1）「人文科学と画像資料研究」2003年7月12日開催　www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/publication/bulletin1_11.pdf
○柳田國男・三木茂『雪国の民俗』甲鳥書林　1944（昭和19）年
○長野県史刊行会 民俗編纂委員会『雪と民俗』第一集・第二集　長野県　1978年
○民俗学研究所編『日本民俗図録』朝日新聞社　1955（昭和30）年
○福田アジオ・上野和男・倉石忠彦・古家信平・高桑守史編『図説日本民俗学』吉川弘文館　2009年
○柏木博・小林忠雄・鈴木一義編『日本人の暮らし―20世紀博物館』講談社　2000年
○福田アジオ「図像資料と民俗学」himoji.kanagawa-u.ac.jp/publication/.../report_05_010.pdf
○吉村善太郎編著『碧眼日本民俗図絵』雄松堂出版　1987年
○今和次郎集第5巻『生活学』 ドメス出版　1971年（考現学などもあるが今回は対象を生活学に絞った）
○神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字文化資料の体系化」研究報告書『日本近世生活絵引』東海道編　2007年ほか
○金貞我『風俗画の中の女たち―朝鮮時代の生活文化』神奈川大学21世紀COE研究叢書神奈川大学評論ブックレット2012年

暮らしの中の『今』を残すⅡ

跡見学園女子大学 文学部 現代文化表現学科 准教授
伊藤　穣

1．はじめに　―現代の生活用品を民俗資料として記録するための技術的考察―

我々が現代の暮らしに用いる生活用品は、日常的に接し、消費するものであって、一般に民俗資料として意識されることは稀である。しかしながら、学術的に民俗資料として扱われるものの多くは、かつての生活用品である。それらは当時の生活の姿を想起、あるいは推察する上で貴重な資料となりうる。当然ながら、一部の研究者を除いて、当時の生活の中でその貴重さが認識されることはなかったと思われるが、これは現代の我々にも言えることである。すなわち、現代の生活用品についての記録は、いずれ民俗資料として考察に活用される可能性を内包していると考えられる。また、現代においても、異なる生活様式との比較において、その差異をより明瞭に示すための材料のひとつともなりうる。

倉石・伊藤は「教育研究への活用を目的とする写真画像を含めた民俗資料のデータベースの考察」を主題として研究を行ってきた[1]。別稿では倉石が台所用品について写真画像を含めた保存と活用について記述している。本稿では、現代の生活用品のうち、育児に関するものに焦点を当て、民俗資料として活用することを前提として、情報技術を用いて記録する方法について考察した。そして、自由度の高い記録方法を採用し、具体的な記録の作成を行った。

2．いかにして生活用品を記録するか

2．1　解決すべき課題

記録の方法について考察する際に、以下の事柄を解決すべき課題として設定した。

- 生活用品の多様性に対応しうる記録方法とはどのようなものか
- 容易に活用できる記録方法とはどのようなものか
- 膨大に存在する生活用品を記録するにはどうすればよいか

2．2　記録に伴う困難さ

生活用日の記録としては、写真や動画、音声といったマルチメディア情報と、年代、大きさ、材質、使用目的といった諸元についての情報とが挙げられる。これらが網羅されていることが理想であるが、実際にはそれらを体系的かつ統一的に記録することは困難である。記録者の考え方によって、必要と考える情報の種類や序列が異なる可能性があるからである。記録すべき対象についても、様々な用途や形状がある。

また、記録の方法についても、特定のデータベースソフトに依存する場合や、CSV形式、XML形式など、様々な形式が考えられる。これらは情報技術についての専門的な知識が必要な場合もあり、他者が情報を活用するうえでの障壁ともなる。

さらに、生活様式の多様化に伴い、現代の生活用品には膨大な種類があるものと考えるべきである。特定の記録者がその全体を把握し、集積することは容易ではない。

2．3　情報の活用手段とインターネット

民俗資料を記録する際には、その活用方法も考慮する必要がある。活用が困難な形態の情報は死蔵されることになるからである。とくに、インターネットが発達した現代では、インターネット上での情報検索に対応することが重要である。そのためには、検索語によって容易に情報に到達できるようにする工夫が必要となる。我々はその方法論について研究を行ってきた[1]。その前提に立ち、情報の集積においては、一般的に広く用いられている方法が最適と考える。とくに、膨大に存在すると想定される現代の生活用品を集積するためには、多くの記録者が必要となることから、情報技術について高度な専門性がなくとも記録が可能な方法を採用することが現実的である。

2．4　記録の形式の提案

民俗資料に限らず、一般的な記録の形式として、一次元的に情報を列挙する方法がある。その場合、たとえば「資料名」「種類」「用途」「大きさ」「材質」「年代」などの諸元をフィールド名とし、それに従って欄に情報を記述することとなる（図1）。

	A	B	C	D	E	F
1	資料名	種類	用途	大きさ	材質	年代
2						
3	哺乳瓶A	食器	授乳	18cm	ガラス	2014
4	子供用スプーン	食器	食事	8cm	金属	2012
5	・・・・・					

図1：フィールド名を固定した記録の例

具体例を挙げる。国立歴史民俗博物館の「データベースれきはく」[2]では、膨大な民俗資料について、館蔵資料について12に区分けされ、それぞれに異なるフィールド名を用いて記述されている。また、滋賀県立琵琶湖博物館[3]は、資料の受け入れ時のカードをもとに、受入番号、資料名、地方名、収集日、収集地、提供者名、収集の経緯、提供者連絡先のほか、入手・製作に関する情報、使用に関する情報、分布・由来・変遷、禁忌・俗信なども記録している。インターネットで公開されているが、その際にはこれらの諸元をさらに整理、統合して表現している。岩手大学による「岩手県有形民俗資料データベース」[4]は、Microsoft Accessを用いて、この形式で、昭和30年頃の生活用品について写真とともに諸元が記述され、単票形式でもインターネット上に公開されている。

これらの場合、資料それぞれを1行のレコードとして表現することとなる。フィールド名が固定されていることから、比較も容易である。しかしながら、いくつかの不具合も見られる。たとえば「大きさ」については、縦、横、高さなど、さらに細かい区分が必要となる場合があるだけではなく、資料の形状によっては明瞭に記載できない場合もありうる。用途に応じて変形するものもある。また、複数の材質が混在している場合や、材質が不明な場合もある。これらについてはフィールド内に複数の情報を列挙したり、あるいは空欄としたりすることになるが、活用の際の混乱の原因ともなる。「種類」「用途」のフィールドについても、さらに細かい分類が必要となることも考えられる。

とくに、インターネット上での検索を前提とする場合には、フィールド名が固定されることによって、検索語の範囲も限定されることになる。フィールドのそれぞれが、包含しうる情報を規定するからである。しかし、自然言語において資料を形容する言葉は多種多様である。微妙な差異や、新しい概念を表現するうえで、言葉が制限されるべきではない。そして、それらが検索語として用いられる場面も想定すべきである。すなわち、資料のレコードには、自由なキーワードを追記しうるような、柔軟性のある構造が求められる。また、「データベースれきはく」に見られるように、データベースの区分ごとに独自のフィールドを用いると、互換性が失われ、横断的な検索が不可能となってしまう。

そこで、フィールド名を設定せずに、資料の特徴を自由に、かつ順不同に記述する方式を用いる。これを我々は「民俗事象タグ」と仮称する。動画投稿サイトなどで、動画の特徴を表し検索性を高めるものとして用いられているタグに着想を得ている。これらは一次元的な記録方法であるが、本研究ではこれに加えて、それぞれのタグが属性を持ちうるように、第二のレコードを並存する構造とすることを提案する。つまり、ひとつの資料が、ひとつ、もしくは複数のレコードを持つのである。このとき、一番目のレコードは、フィールド名の役割も担いつつ、それ自身が検索語となりうるような自由さを持つことになる。

こうした構造は、一見、インターネット以前の、不統一で活用が困難な時代の記録方法のようにも見える。しかしながら、こうした情報がインターネット上で公開されていれば、それらを自動的に収集し整理して活用性を高めることが可能である。重要なのは、たとえあいまいな検索語を用いた場合であっても、その資料の存在を知覚し、そこに到達できるようにすることである。

なお、含めることが望ましい情報として、写真画像のほか「（一般的な）用品名」「記録年」などが挙げられる。こうした情報を付加することを基本として、次章において具体的な記録作成の例を示す。

3．育児に関する生活用品の記録

3．1　記録の意義

生活用品の中でも、育児に関するもの（以下、育児用品）は、当然ながら使用は育児期間中に限られ、育児の終了とともに廃棄される。あるいは譲渡される場合もあるが、現代ではそのほとんどが消耗品であり、最長でも数年間の使用を前提としているため、素材や構造に耐久性が求められていない。その一方で、時代の変化や、グローバル化によって、従来

にない新たな製品が流通するなどの現象もみられる。こうしたことから、実物が残ることは稀であり、省みられることがなく、その記憶もやがて風化してゆく。とくに都市生活においては生活空間が限定されており、生活の新たな段階に対応するには、不要となったものは処分される。製造した企業内には、過去の製品の記録が残されていると思われるが、少なくともインターネット上の情報は新製品に切り替わり、容易には閲覧できなくなる。また、倒産や業態の変更によって散逸する可能性もある。

しかしこれらは、育児の現場において活用され、育児という行為の実態と密接に関わっていたはずである。生活の在り様を後世に伝えるには、こうした日常的な事物について、意識的に記録する姿勢が重要である。

3．2　タグ付け

育児用品は、生活の場面に応じて様々な分類がありうる。たとえば、食事や排便、入浴、衣類、洗濯、遊び、外出などである。また、乳児か幼児か、といった子供の発達の時期によって分類することもできる。性別によって分かれる場合もある。あるいは、たとえば「衛生用品」として、紙おむつ、アルコールティッシュ、お食事エプロンなど、生活の場面を横断する内容を含める場合もありうる。これらの分類を多次元的な配列として整理を行うことは容易ではないが、それぞれをタグとして、並列に記述することは可能である。本研究では、これらについて、敢えて分類の枠組みを意識せずに記録することとする。

3．3　写真画像

写真画像は、育児用品の形状について正確に再現しうるまでに詳細な情報を含んでいることが理想である。そのためには、あらゆる角度から、寸法を正確に採取できるように撮影する必要がある。カメラ撮影の場合、レンズの特性による歪曲収差が発生するため、その補正も必要となる。しかし、現実にはこれらは困難であり、資料収集の難度を徒に高めることになる。また、民俗資料の研究において、数値的な正確さは必ずしも重要ではない。そこで、被写体の寸法について、画像の内容から概算できるように、比較のための物体を同じ画像内に含めることとする。一般的には定規などが用いられるが、本研究では、縦20cm、横30cmの板状のものを配置することとした。3次元的に採寸するには立方体のほうが有利であるが、手配の容易さから、段ボールを成形したものを採用した。

3．4　公開方法

写真画像とタグは、ウェブページとして公開することを前提とする。その際、ひとつのページに1点とする必要はなく、明瞭に区別することが可能であれば、複数の育児用品を列挙することもありうる。公開の方法を限定することは、草の根的に情報を収集するうえで抵抗となりうる。逆に言えば、民俗学的視座とは全く別の意図をもって公開されている情報であっても、それを民俗資料として解釈し集積する情報の一部とすることもありうるということである。

4．記録の具体例

以下の記録は、伊藤の住居にある育児用品である。いずれも平成27年1月に記録した。これらは、育児用品全体のごく一部である。また、それぞれの育児用品について、使用した感想や、関連する別の育児用品についても記載する予定であるが、本稿では割愛した。

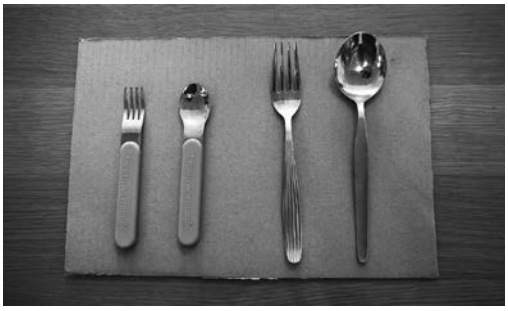
【名　　称】 ロアンジュ RU490

【記　録　年】 平成27年1月

【民俗事象タグ】 ロアンジュ、Combi、子供、乳児、幼児、食事、睡眠、椅子、キャスター、変形、0歳から3歳、スイング

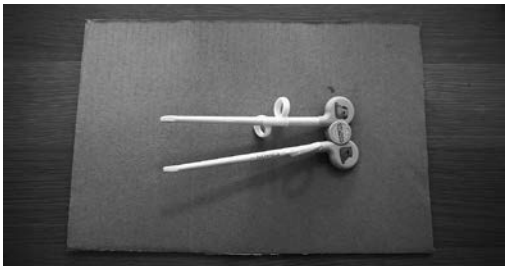
【備　　考】 Combi社製。主に、0歳から3歳までの子供に使用する。変形機構があるため、背もたれ部分を倒して平面にすることができ、寝返り前の乳児を寝かせる場合や、背面を起こして食事を採らせる場合などに使用する。テーブルのパーツを装着することもできる。キャスターつきで移動が容易であることから、場所を固定することなく、必要に応じて移動させて使用する。

【名　　称】スプーン、フォーク
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】スプーン、フォーク、子供、乳児、幼児、小型、保育園
【備　　考】主に1歳から6歳までの子供が使用する。子供の手にも馴染むように、プラスチックや樹脂によって持ち手部分が覆われている。保育園の食事にも用いられる。写真は大人用のものと並べて撮影。

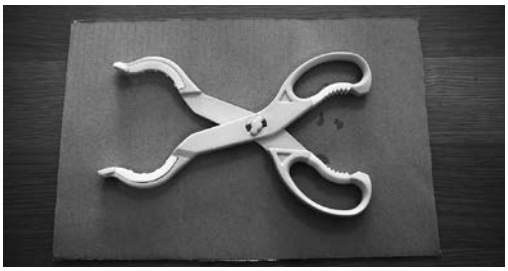


【名　　称】コップ
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】コップ、子供、乳児、幼児、両手
【備　　考】1歳から2歳ごろの子供が使用する。持ちやすいように両側に持ち手がついている。

【名　　称】エジソンの箸
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】子供、幼児、箸、EDISON、食事
【備　　考】EDISON 社製。2歳から4歳ごろの子供が使用する。箸を正しく握れるように、指を差し込む輪がつけられている。また、箸は片方で連結されており、幼児でも扱いやすくなっている。



【名　　称】哺乳瓶はさみ
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】子供、乳児、授乳、消毒、哺乳瓶
【備　　考】熱湯で煮沸消毒した哺乳瓶を鍋から安全に取り出す時に使用する。両方の持ち手の内側は、哺乳瓶を蓋などを挟んで回転させる目的にも使われる。また、分解して洗浄しやすい構造になっている。

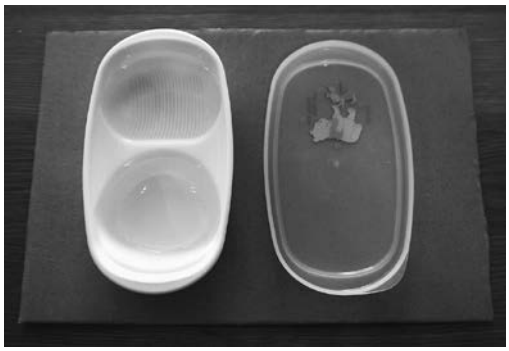


【名　　称】哺乳瓶
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】哺乳瓶、乳児、授乳、Pigeon
【備　　考】Pigeon社製。哺乳瓶は容量や素材、乳首の形状などにバリエーションがある。

【名　　称】スプーン、フォーク
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】子供、乳児、食事、スプーン、フォーク
【備　　考】乳児が、自らスプーンやフォークを使って食事をする訓練時期に使用。

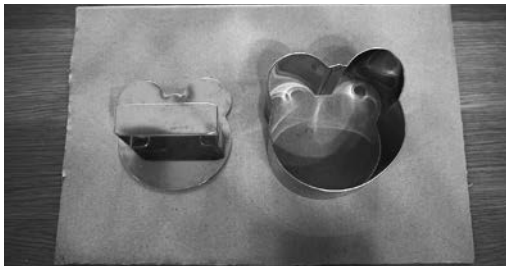
【名　　称】ヌードルカッター
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】子供、乳児、食事、離乳食、Combi
【備　　考】Combi社製。離乳食などで、主に長さのある麺類を乳児が食べやすい大きさに切るときに用いる。

【名　　称】離乳食調理器
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】子供、乳児、食事、離乳食、調理、流動食、濾し、保存
【備　　考】離乳食を作る際に必要なものがセットになっている。食材を濾し、流動食とする際に使用するものや、作った離乳食を保存するタッパーなどからなる。適量が分かりやすいように目盛りがつけられているものもある。



【名　　称】離乳食（レトルトパウチ食品）
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】子供、乳児、食事、離乳食
【備　　考】湯煎によって簡単に調理できるレトルト離乳食。月齢や離乳の進み具合に応じて多種が発売されている。

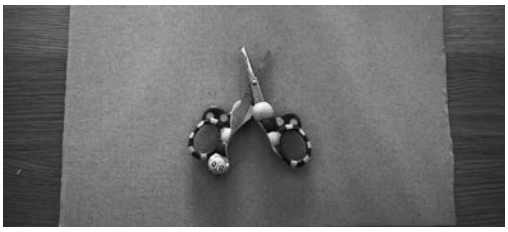
【名　　称】厚焼きホットケーキ型
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】子供、乳児、幼児、食事、調理
【備　　考】菓子やご飯の型押しに使用する。



【名　　称】chuboos! のりパンチ
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】子供、乳児、幼児、食事、調理、海苔、キャラ弁、型抜き
【備　　考】おにぎりなどに子供が好む表情をつけるため海苔を型抜きし、成形する。いわゆる「キャラ弁」の調理に良く使われる。

【名　　称】ベイビーピンセット
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】子供、乳児、幼児、鼻掃除
【備　　考】乳児の鼻の掃除に使用する。

【名　　称】ソフトシザーズ
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】子供、乳児、幼児、爪切り
【備　　考】乳幼児の柔らかい爪を切る際に使用する。先端が丸く、怪我をしにくい構造になっている。

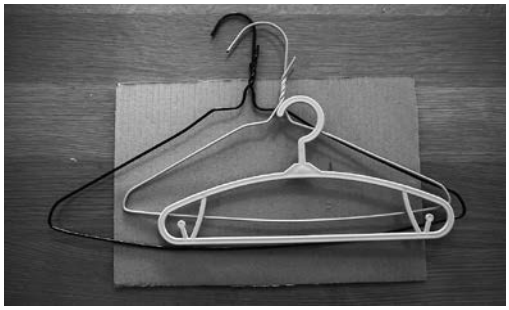


【名　　称】コム
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】子供、乳児、幼児、ブラシ、髪
【備　　考】大人用のものに比べ、ブラシの毛が柔らかく、肌理が細かい。また、乳幼児の興味を引く装飾が施されている。

【名　　称】布おむつ
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】子供、乳児、幼児、おむつ、布
【備　　考】布おむつは、布部分と、それを押さえるカバーと組みで使用する。カバーは、パンツ式のものもあり、場合によっては複数のカバーを併用する。布は、吸水性を高めるため、複数枚重ねることもある。

【名　　称】ベビーバス
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】子供、乳児、入浴、風呂
【備　　考】出生直後から首すわり前までの主に新生児の沐浴に使用する。底には、乳児を片手に抱いた女性(母親など）でも容易に外せ、湯を抜きやすい栓が施されている。

【名　　称】子供用ハンガー
【記　録　年】平成27年1月
【民俗事象タグ】子供、衣類、洗濯、ハンガー
【備　　考】子供用の衣類を干す際に使用する。大人用のハンガーと並べて撮影。幅は30cm前後であり、乳幼児用の小さな衣服を干しやすくなっている。



5. おわりに

本稿では、現代の育児用品について、具体的な記録を行うことをとおして、民俗資料として保存し活用するための方法について考察した。これらの記録についてはインターネット上で公開し、教育や研究において活用可能なものとして整備してゆく予定である。

注

[1] 特別研究助成費報告「教育研究への活用を目的とする写真画像を含めた民俗資料データベースの考察」, 伊藤穣, 倉石あつ子, 跡見学園女子大学花蹊記念資料館・学芸員課程『にいくら』No19, 2014

[2] 国立歴史民俗博物館
http://www.rekihaku.ac.jp/doc/t-db-index.html

[3] 滋賀県立琵琶湖博物館
http://www.lbm.go.jp/emuseum/database/minzoku/index.html

[4] 岩手県有形民俗資料データベース
http://www.museum.iwate-u.ac.jp/dfcweb/osanai/o-flame.htm

跡見学園女子大学花蹊記念資料館
平成26年度活動報告

平成26年度 企画展覧会一覧

期　間	開館日数	展覧会名 展示室1	展覧会名 展示室2	備　考
4月1日(火)～ 6月1日(日)	51	花蹊・玉枝の書画展		入学式・4/29開館
6月16日(月)～ 8月3日(日)	44	資料館収蔵品展（絵）	アトミ・アート展	7/21開館 オープンキャンパス開館
9月22日(月)～ 11月8日(土)	42	資料館収蔵品展（書）	跡見廉書会第8回OG作品展	10/13開館・紫祭期間開館・11/3開館
11月24日(月)～ 12月20日(土)	25	資料館収蔵品展		11/24開館
平成27年 1月27日(火)～ 2月9日(月)	12	博物館実習生模擬展示		
3月13日(金)～ 3月31日(火)	13	50周年特別展示Ⅰ「学祖　跡見花蹊の世界」		
合　計	187			

平成26年度 中高展示一覧

期　間	開館日数	中　高　展　示	備　考
4月8日(火)～ 7月19日(土)	84	花蹊記念資料館収蔵展（春期）	3/21～4/7は春季休業のため閉館
9月1日(月)～ 平成27年 2月23日(月)	127	花蹊記念資料館収蔵展（秋期）	7/20～8/31は夏季休業のため閉館 12/21～1/8は冬季休業のため閉館
2月24日(火)～ 3月20日(木)	22	花蹊記念資料館収蔵展（春期）	
合　計	233		